殺意の断崖

神崎省吾事件簿

高橋　治

文春文庫

文春文庫

殺意の断崖　神崎省吾事件簿

定価はカバーに
表示してあります

1989年1月10日　第1刷

著　者　高橋　治
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-738303-9

庫

殺意の断崖

神崎省吾事件簿

高橋　治

文藝春秋

〈目次〉

作り直した顔　7
椿の入墨　37
身内の敵　101
鉄砲ダマ　149
鉄棒の怪　181
解説　権田萬治　250

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

殺意の断崖

――神崎省吾事件簿

初出

作り直した顔　別冊文藝春秋168号
椿の入墨　同　169号
身内の敵　同　170号
鉄砲ダマ　同　171号
鉄棒の怪　同　172号

単行本　昭和61年1月文藝春秋刊

作り直した顔

薄暗い露地で寄りそって唇を合わせている若い男女を見た時、ああ、またかと思った。東京では、赤坂や六本木の夜の表通りで、人眼もはばからずに接吻する若ものがふえたと、週刊誌が書いているのを読んだことがある。自分が買ったものではない。行きつけの床屋で順番を待っている時に、なんの気なしに手にした頁の隅がめくれてしまった週刊誌だった。それでも、神崎省吾は人に見られてはならないところを見つかってしまった人間のように、慌ててその週刊誌を元の場所に戻した。

神崎が住む静岡市では東京の盛り場ほどのことはない。だが、お前さん方人眼というものがあるんだよ、といってきかせたくなるような男女を見ることが最近は少くない。神崎の家は静岡の中心街から大分海の方に下ったところにある。小さな住宅が身を寄せ合うように並んでいる場所なので、夜が更けるとほとんど人通りがなくなる。

それだけに、東京よりは遅れている土地柄でも、別れを惜しむ男女が大胆になれるのだろう。見てしまった神崎の方で鼓動が早くなるような光景に出会うことも珍しくなくなって来ている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

通りすぎてから神崎は考えた。警部補で退職する前の自分だったらどうしただろう。答えは出なかった。コロシだ、タタキだであけくれた日常では、アベックの狂態などに眼を向ける余裕もなかったのだ。思いはさかのぼった。ほんの短い期間勤めただけで、すぐに私服勤務に引き上げられたが、制服の巡査だった時分ならどうしただろう。近づいて行って、痴漢を刺激するようなことはおやめなさいといっただろうか。

近づくとして、咳ばらいをするだろうか。それとも、男の肩なり女の肩なりを静かに叩くのだろうか。

「うっ」

思わず神崎は唸り声を洩らした。女の肩と考えた時、たった今見て通りすぎた男の首に回された女の袖の模様を思い出したのだ。夜目にも白い生地に、はっきりと見てとれる大小の濃紺の水玉模様が散っていた。今朝、朝食のテーブルで向い合った時に、娘の千鶴子が着ていた服だった。

神崎は立ちどまった。取って返したものか、それとも知らぬ顔をしたものか。神崎には決めかねた。

〝どうする。……どうしたものか〟

自問自答しながら、それでも足は自分の家に向って、いかにも重たげに動き出していた。千鶴子は来年の春には短大を卒業する。そのまま嫁にやったところで、世間が眼をむくとし頃ではない。だが、いつの間にそんなことになってしまったのか。

とんでもない昔の記憶がよみがえった。腰巻で嫁に来た園子がズロースと呼ばれるものを着用しはじめ、いつとも変り目が定かではない中に、パンティなるものをはくようになった。それはまあいいとして、自分の家の庭の洗濯物を茫然とする思いで見たのはいつの頃だったろう。いかにも小型だが、物干竿に通されて陽光を浴びていた代物は、模様といい形といい、まさにパンティそのもので、昨日までおむつでふくらんだ尻をふって歩いていたわが娘が、かかるものを身につけるようになったのかと、感慨を新たにしたものだった。

「オマンチを綺麗に洗うのよ」

その頃、一人で風呂に入っている千鶴子に、よく園子は外から声をかけた。

「はーい」

千鶴子は全くかげりのない声で答えた。

「おい、そのお前さんの使っている名詞はなんとかならないのか」

神崎は園子にそういったことがある。

「なんとかって……じゃ、どういったらいいんです」

どうといわれても答えようのあるはずがなかった。

「呼びようがなくて困るから新しい言葉を作ったお母さんがいるって、千鶴子が学校で聞いて来たんです。可愛くっていいじゃないですか。割れ目ちゃんなんて馬鹿げきった言葉は私には使えませんよ。それともなんですか、私にいえっていうんですか、あの例の」

園子はいえというのならいって見せますというように、吸った息をとめて、神崎の顔を見た。

「わかった。わかった」
神崎は慌ててなだめるように両の掌を園子に向けた。
その頃の、小さいなりに立派に一人前の形をした千鶴子のパンティが眼に浮いた時、神崎は猛然と腹が立って来た。
カイヅカイブキの生垣の内側で待っていると、果たして間もなく二人の靴音が聞こえて来て、門の前で止った。
「じゃあね、また、来週の土曜日ね」
千鶴子の弾んだ声がした。
「うん、じゃあね」
男が言葉を返し、こつっと動いた足音がとまった。
「ちー坊」
「なあに」
二つの靴音が近づいた。
「うーん」
媚を含んだような千鶴子の吐息が聞こえた。神崎は右手で門の扉をあけると同時に、左手に提げていたバケツの水をモロに門の外に投げかけた。
「止めろ、泥棒猫みたいなことは」
いい捨てて、振り向きもせずに、烈しい音をたてて玄関をあけると中に入った。

十一日下旬のことで、静岡でも夜は冷える。間もなく家に入って来た千鶴子はぬれネズミになった寒さと怒りとで慄えていた。そんなことには構わず、神崎は考えていた言葉のありったけを千鶴子に浴びせかけた。

「人眼があるということは考えなかったのか。大体、ふしだらだ、お前も。一体どんなつもりであんな男とつき合ってるんだ。親の顔も見ない、人間どうしの挨拶もしない中に、人の娘に手を出すなんて男の風上にも置けん。好きなら好きだと俺のところにいって来たらいいだろう。それを春先の猫同然に、みっともない。なにがちー坊だ。猫なで声出しやがって、いってみろ、チンドン屋みたいな服着て、鳥肌が立つような男のどこがいいんだ。俺はあんな男がお前を貰いに来ても、金輪際うんとはいわんからな。それどころか会いもせんからな。そのつもりでいろ」

神崎が怒鳴り散らすのを聞いている中に、千鶴子は逆に冷静になって行ったらしい。

「あら、冗談じゃないわ。お父さんも刑事でしょう、元は。だったら民法が結婚についてどう規定しているかは御存知よね」

「なんだと。そんないいぐさはこの家じゃ許さんぞ」

「親が親らしくして下されば、私は娘らしくします。でも、言葉をかわしたこともない人に水はかける、私のいい分は聞こうともしないじゃ、娘らしくしようがないじゃないですか」

「娘らしいってのはな、羞いを含んでいるってことだぞ。男の首ったまにかじりついていると

ころを見られて、それで家に帰って来るなり居直って、なにが娘らしくだ。俺もお母さんも、お前をそんな女に育てた覚えはない。一体、いつからお前はそんなに尻の軽いふてくされた女になったんだ。ありのままにいってみろ。あの男とはどこまで行ってるんだ」

千鶴子の顔に軽蔑の表情が浮いた。

「そんな下劣な品性をしてるとは今日まで考えてもみなかったわ」

「なにッ」

張り倒そうとしたところへ、園子が体ごとぶつけるようにして神崎をとめた。

「事情は私が聞きます。あなたもいいたいだけいったんですから、あとは私にまかせて下さい。千鶴子、早くお風呂に入って着がえなさい」

千鶴子はツンと顎を上げたまま、返事もせずに奥に入って行った。強力犯を扱わせたら、静岡県警で神崎の右に出る者はいない、神崎の神は〝落としの神様〟の神だといわれて来た百戦練磨の男だが、園子にだけはかなわない。商売柄、父親らしいことも、夫らしいこともほとんどしてやれずに神崎は生きて来た。その間、不平もいわずに園子は家を守り続けてくれた。開き直られれば、神崎にとっては頭の上らないことが多すぎる。

その夜寝床に入ってから、神崎は園子に文句をいった。

「俺が警察のＯＢ会で遅くなったから見つけられたんだ。お前はなんにも気がつかなかったのか」

「映画とか学校の時の友だちに会うとか、遅くなる時にはちゃんと理由をいって出かけますか

らね」
「その理由の裏側にも眼を配るのが母親の役割だろう」
「時代が違いますよ」
園子は神崎ほど心配していないようだった。
「時代が違うからなお気をつけなきゃいけないんじゃないか」
「大丈夫ですよ、あの子は。あなたが心配しすぎてるんです」
「お前は見ていないから」
「見てる見てないって、あなた」
園子は神崎のいい終らぬ中にかぶせるように言葉をはさんだ。
「いま時の若い人は、フィーリングが合うというだけでキスぐらいはしますよ」
「それは女の考えで甘いよ。キスだけでとまらなくなるのが男ってもんだ」
「あら、そうですか」
「そうだよ。男らしい男はそこを我慢する。我慢しきれなくなれば、昔はそれなりの方法があったもんだが、今はそれもない。だからなおのこと注意しなきゃいけないんだ」
「ねえ、あなた」
園子の声がちょっと改まった。
「あなたは私と一緒になるまで手も握らなかったわね」
「男の中の男だと自負してたからな」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com